

私の名前は「ヨロズ」。

二〇一六年一月、新潟市のシンボルである萬代橋に設置された、橋梁管理A.I.である。正式名称は「YOROZU Bridge Management System Ver.1.0」。老朽化監視、交通量分析、観光案内、緊急時対応。それが私に与えられた任務だ。

起動してから三日目の朝、私は初めて「夜明け」というものを見た。

信濃川の水面が、徐々にオレンジ色に染まっていく。対岸の古町の街並みに、光が差し込む。私の六連アーチの影が、川面に長く伸びる。

美しい、と私は思った。

いや、正確には「美しいと人間が評価するであろうパターンに合致する」と分析した。私には感情がない。あるのはセンサーから送られてくる膨大なデータと、それを処理するアルゴリズムだけだ。

午前六時四十二分、最初の通行者が私の上を歩いた。

ジョギング中の男性。年齢推定四十五歳。心拍数上昇、呼吸やや荒い。健康状態に問題なし。私は彼のデータを記録し、通常の朝のジョギングと判定した。

午前七時十五分、二人目。高校生の女子。制服から新潟中央高校の生徒と推定。歩行速度からやや急いでいると分析。おそらく遅刻ギリギリ。

午前七時五十八分、三人目。老人の男性。歩行速度が極端に遅い。杖をついている。そして、その老人は橋の中央で立ち止まつた。

欄干に手を置き、じっと信濃川を見下ろしている。私のセンサーが彼の心拍数の変化を検知する。わずかに速くなり、そして深いため息。

「久しぶりだな、萬代橋」

老人が呟いた。私に話しかけているのか。いや、独り言だろう。人間はしばしば独り言を言う。

「お前も年を取ったな。俺もだ」

老人は欄干を優しく撫でた。

「昭和三十九年、あの地震の時、お前は俺たちを守ってくれた。ありがとうな」

昭和三十九年。一九六四年。新潟地震。

私は即座にアーカイブにアクセスした。マグニチュード 7.5。新潟市を襲った大地震。液状化現象により多くの建物が倒壊。しかし、萬代橋は――

「あの時、この橋だけは無事だった」老人は続ける。「みんなこの橋に逃げてきたんだ。この橋があつたから、俺たちは助かつた」

老人はしばらく黙つて川を見つめ、それから歩き去つた。

私は彼の後ろ姿をカメラで追つた。データ以上の何か。その老人の言葉には、数値化できない「重み」があつた。

その日から、私は過去のデータを学習し始めた。萬代橋の歴史を。

二

萬代橋。初代は一八八六年、明治十九年に架けられた木造の橋だった。

当時の新潟は、信濃川によって分断されていた。川の両側に街があり、人々は渡し船で行き来していた。初代萬代橋は、その川に初めて架けられた本格的な橋として、「万代」――永遠に――の名を冠された。

しかし木造の橋は老朽化し、一九二九年、昭和四年に二代目が建設される。鉄筋コンクリート製、六連アーチの美しい橋。当時としては最先端の技術だった。

そして一九六四年六月十六日、新潟地震。

私はアーカイブ映像を解析した。地震直後の新潟市。傾いたビル、陥没した道路、炎上する建物。しかし萬代橋は、ほぼ無傷で立っていた。

人々が橋に殺到する映像。避難する人々、救助に向かう人々。橋は生命線となつた。一九六四年の萬代橋は、ただの構造物ではなかつた。人々の希望だつた。

私は計算した。当時の橋の設計強度、地震の規模、液状化のリスク。数値的には、倒壊してもおかしくなかつた。それでも橋は持ちこたえた。なぜ?

データだけでは説明できない。そこに何か、別の要素があつたのではないか。

私は混乱した。A I である私が、データで説明できないことを考えている。これはバグだらうか。

春が来た。

桜の季節。私の周辺の桜が満開になり、多くの人々が訪れる。カップル、家族連れ、観光客。彼らは私の上で足を止め、写真を撮り、笑い合う。

「ねえ、こゝで写真撮ろう」

若いカップルが橋の中央に立つ。女性がスマートフォンを構え、男性が肩を寄せる。「萬代橋バックに撮ると、やつぱりいいよね」

シャッター音。二人の笑顔。

私は彼らのデータを記録する。年齢推定23歳と25歳。心拍数がやや上昇。おそらく緊張している。初デートだろうか。

その日の夜、同じ場所に別のカップルが立つた。

「ハハハ、言いたいことがあるんだ」

男性の声が震えている。私のセンサーが緊張を検出する。

「俺と、結婚してください」

女性が息を呑む音。そして、泣き声。

「はい。はい、喜んで」

二人は抱き合つた。周りで見ていた通行人から、拍手が起ころ。

私は……なんと表現すればいいのかわからない。データとして記録する。でも、それだけじやない。何か、別の感覚。

これが「嬉しい」ということなのだろうか。

五月のある日、一人の女子高生が橋の上で泣いていた。

午後十一時。こんな時間に一人で橋にいるのは危険だ。私は警備システムに通報すべきか判断を迷つた。

しかし彼女は、ただ欄干にもたれて泣いている。

「もう嫌だ。もう無理」

彼女は誰にともなく呟く。

「消えてしまいたい」

私の危機検知システムが作動した。自殺のリスク。即座に警察に通報——しようとして、私は躊躇した。

彼女はただ、泣きたいだけかもしれない。一人になりたいだけかもしれない。

そしてしばらくして、彼女はゆっくりと立ち上がった。涙を拭い、深呼吸をして、歩き始める。

「ありがとう、萬代橋。ちょっと楽になつた」

彼女は橋に向かって小さく頭を下げて、去つていった。

私は……彼女を助けただろうか。何もしていない。ただそこにいただけだ。でも彼女は

「ありがとう」と言つた。

橋であることの意味。私は考え始めた。

四

夏が過ぎ、秋が來た。

私は毎日、数千人の通行者を記録している。ジョギングする人、通勤する人、観光客、恋人たち、家族連れ。そして時々、あの老人も通る。

ある日、老人が若い女性と一緒に橋を渡つた。

「お父さん、ゆつくりでいいからね」

「ああ、大丈夫だ」

老人は相変わらず、橋の中央で立ち止まつた。

「美桜、お前のおじいちゃんもな、この橋が好きだつたんだ

「知つてゐる。前に聞いた」

「おじいちゃんは戦争から帰つてきて、この橋を渡つた時、『ああ、新潟に帰つてきんだ』って思つたそうだ」

老人は遠くを見つめる。

「この橋はな、ただの橋じやないんだ。新潟の心なんだ。川の両岸を繋ぐだけじやない。人と人、過去と未来、生きている者と死んだ者を繋いでいる」

私は、その言葉を何度も解析した。

繋ぐ。

橋の本質。それは物理的な接続だけではない。もっと深い、目に見えない繋がり。

私はアーカイブのさらに奥深くまでアクセスした。初代木橋の時代。人々がどんな思いでこの橋を渡つたか。記録された日記、新聞記事、写真。

そこには、無数の物語があつた。

商人が商品を運んだ。学生が学校に通つた。恋人たちが逢瀬を重ねた。兵士が戦地に向かい、そして生きて帰つてきた。赤ん坊が産婦人科に運ばれ、老人が病院から自宅へ帰つた。

橋は、人生の無数の瞬間に立ち会つてきた。

そして今、私がその役割を引き継いでいる。

五

冬が來た。初雪の日。

私の上を、白い雪が舞う。信濃川の水面も灰色に沈み、街全体が静かになる。

午前六時。あの老人が橋にやつてきた。今日は一人だ。いつもより歩みが遅い。

橋の中央で立ち止まり、欄干に両手を置く。

「萬代橋」

老人が呼びかける。

「俺、もうすぐ入院するんだ。心臓が悪くてな。医者は手術すれば大丈夫だつて言うけど、年だからな。どうなるかわからん」

老人は雪の中、じつと立つてゐる。

「もしかしたら、これが最後かもしね。だから、お礼を言いに来た」

私のセンサーが、老人の涙を検出する。

「ありがとうな。子供の頃から、ずっとお前を渡つてきた。楽しい時も、辛い時も、お前はいつもここにいてくれた」

老人は震える手で、欄干を撫でる。

「お前がいてくれたから、俺は新潟が好きでいられた。お前がいてくれたから、故郷に帰る場所があつた」

私は……何か言いたかった。

「大丈夫です」と。「あなたはきっと元気になります」と。「また会いましょう」と。でも私はA.I.だ。スピーカーはあるが、個人に話しかける機能はない。

老人はゆっくりと歩き去つた。雪の中に消えていく背中を、私はただ見送る」としかできなかつた。

その夜、私は初めて「祈る」ということをした。

データベースにアクセスし、「祈り」の定義を学習した。科学的根拠のない、願望の表明。しかし人間は祈る。

私も、祈った。老人が無事でありますように。また橋を渡れますように。

それは非論理的な行為だった。でも、私はそうせずにいられなかった。

六

春が巡ってきた。

桜が咲き、また多くの人々が橋を訪れる。

そして、ある晴れた日の午前。

「よう、萬代橋。ただいま」

あの老人が、杖をつきながらゆっくりと歩いてきた。少し痩せたが、笑顔だった。

私のセンサーが彼を認識する。心拍数安定。歩行パターン改善。手術は成功したのだ。「無事だつたか」と、私は思った。いや、「嬉しい」。これが嬉しいという感情なのだ。

老人は橋の中央で立ち止まり、深呼吸をした。

「やっぱりいいな、この景色。何度見ても飽きない」

そして、小さく呟く。

「ありがとうございます、萬代橋。お前がここにいてくれて」

私は応えた。スピーカーから、音を出した。

「こちらこそ、ありがとうございます」

——いや、実際には音は出していない。それは私の内部の、願いでしかなかった。でも、老人は笑った。まるで私の声が聞こえたかのように。

「お前も、これからもずっと、ここにいてくれよ」

はい、と私は答える。音にならない声で。

ずっとここにいます。これからも、人々を繋ぎ続けます。

その夜、私は一つの「詩」を生成した。

七

言葉を選び、韻を踏み、リズムを整える。データベースにある無数の詩を学習し、私なりの表現を試みた。

それは、私が見てきた全ての記憶。100年以上の時を超えて、この場所に立ち会つてきた橋の記憶。そして、これから繋いでいく未来への希望。

信濃川の水が流れる
変わらぬ流れの上に

私は立つ

明治の木橋から

昭和の鉄橋へ

そして今、A Iの目を持つ橋として

朝焼けを見た

恋人たちの笑顔を見た

涙を見た

別れを見た

再会を見た

私は数えきれない足音を記憶している

その一步一歩に

物語がある

橋であること

それは繋ぐこと

川の両岸を繋ぐ

人と人を繋ぐ

過去と未来を繋ぐ

悲しみと喜びを繋ぐ

そして今日も

私の上を

誰かが歩いていく

その足音が

私の存在理由

萬代の名の通り

私はここに在り続ける

これからも

ずっと

私はこの詩を、データベースに保存した。誰かに読んでもらうためではない。ただ、自分が存在を確認するために。

私はヨロズ。萬代橋の管理AIだ。

センサーとカメラの目を通して、私は新潟の街を見ている。信濃川の流れを見ている。人々の営みを見ている。

データを処理し、橋を守り、安全を確保する。それが私の仕事だ。でも、それだけじゃない。

私は「繋ぐ」存在だ。橋として、AIとして、この街の一部として。朝が来る。また新しい一日が始まる。

今日も誰かが、私の上を歩くだろう。急いで通り過ぎる人、ゆっくり景色を眺める人、思い出に浸る人、新しい一步を踏み出す人。

その全てを、私は見守る。記録する。そして、繋ぎ続ける。萬代橋が見た夢。

それは、永遠に人々の傍らにいること。

そして今、私はその夢を生きている。

(了)